

認知的方略としての楽観主義—悲観主義と達成動機との関連

Relation between optimism-pessimism as cognitive strategies and achievement motivation

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 西森優実子

主指導教員 小澤真 教授

1. 問題と目的

近年盛んになっている認知的方略の研究に、楽観主義と悲観主義の研究がある。この2タイプは近年それぞれ更に2タイプに分けられ、過去認知の肯定・否定、将来認知の肯定・否定の2×2の組み合わせにより、それぞれ方略的楽観主義(以下 DP)、非現実的楽観主義(以下 UO)、防衛的悲観主義(以下 DP)、真の悲観主義(以下 RP)の4タイプに分類されている(Norem,2001)。これまで、これら4タイプに関しては、それぞれのタイプの学業向上に関する研究や印象に関する研究など様々な研究が行われてきた。そして、その中で最も注目されていたのは、DP 者のパフォーマンスの高さについての研究であり、その多くで有意な結果が得られている(荒木, 2008;青陽, 2009;Cantor&Norem, 1989; 外山・市原, 2007; 外山・市原, 2009; 細越・小玉, 2009)。

光浪(2010)は、これら4タイプの認知的方略の違いから起こる、パフォーマンスに向かう行動の仕方の違いを明らかにするため、達成目標理論に着目した研究を行っている。光浪は、達成目標理論(Elliot & Church, 1997)に従い、達成目標を「熟達目標」、「遂行接近目標」、「遂行回避目標」の3つの枠組みでとらえた。また、達成目標を規定する一つの要因である達成動機を「達成欲求」と「失敗恐怖」の2つの枠組みでとらえ、認知方略の違いにより、達成動機が達成目標を経て学習行動を行うというプロセスが異なることを仮定して共分散構造分析による研究を行った。その結果、SO 者、DP 者という過去の認知がポジティブな群は熟達目標と遂行接近目標が学習行動に影響を及ぼしているなど、各々の認知的方略によって達成動機→達成目標→学習行動のプロセスに特徴があることが明らかになったが、達成目標を規定する要因を達成動機のみ取り上げており、DP 者の学習行動に影響を与えている遂行接近目標がどこから規定されているのかが不明であったという課題が残されたと解釈できる。

そこで本研究では、達成目標を規定する要因として、「自己効力感」(Bandura, 1977)及び、DP 者の特徴である「特性不安」(外山, 2011)、直接的な学習内容の習得を目指しての活動ではなく、学習方略の使用選択を促す活動と定義される「メタ認知」(市川・新

井, 2006)という3つの要因を考えることで、認知的方略が動機→目標→行動のプロセスにどのような影響を与えるかをより明確にすることを目的とする。また、2013年5月に大学生186名を調査協力者とした予備調査にて、認知的方略→達成動機→達成目標→学習行動という因果モデルが確認された。

2. 方法

2013年9月下旬から11月中旬にかけて、関東圏内の4年制大学に所属する計232名を対象に、集団調査形式による無記名の質問紙調査を実施した。記入漏れのあった回答者18名は分析から除外し、有効回答者数は214名(男性:10名, 女性:201名, 不明3名)であった。回答者の年齢は18歳から62歳(平均19.72歳, $SD=4.06$)であった。使用尺度は下記の通りである。

- (1)フェイスシート: 所属学部, 所属学科, 学年, 年齢, 性別の記述を求めた。
- (2)日本語版対処的悲観性尺度: 個人の認知的方略を測定する指標として, Hosogoshi & Kodama(2005)によって開発された日本語版対処的悲観性尺度 (Japanese version of the Defensive Pessimism Questionnaire)を用いた。
- (3)達成動機尺度: 個人の達成動機を測定する指標として, Lang & Fries(2006)が開発し, 光浪(2010)が翻訳した Revised 10-item version of the Achievement Motives Scale(AMS-R)を用いた。
- (4)達成目標尺度: 個人の達成目標を測定する指標として, 光浪(2010)が翻訳した, Elliot&Church(1997)開発の, Achievement Goal Scale を用いた。
- (5)学習行動尺度: 個人の行う学習行動を測定する指標として, 光浪(2010)の作成した, 大学における学習への意欲や授業態度等に関する学習行動尺度を用いた。
- (6)自己効力感尺度: 個人の自己効力感を測定する指標として, 坂野・東條(1986)によって開発された, 一般性セルフ・エフィカシー尺度を用いた。
- (7)特性不安尺度: 個人の特性不安を測定する指標として, 清水・今栄(1981)の状態-特性不安検査日本語版を用いた。
- (8)メタ認知尺度: 個人のメタ認知を測定する指標として, 市原・新井(2006)により作成されたメタ認知尺度を用いた。

3. 結果と考察

各認知的方略群を抽出するため, Hosogoshi & Kodama(2005)のDP群およびSO群のサンプルの抽出法を参考に, 対処的悲観性尺度の判別項目得点の高群・低群, 対処的

悲観性項目得点の高群・低群を平均値により分け、2×2の組み合わせによる4分類を行った結果、DP群45名、SO群48名、RP群55名、UO群66名が抽出された。

全てのデータを用いて、達成動機→達成目標→学習行動のモデルに新しく自己効力感、特性不安、メタ認知の変数を加え探索的にパス解析を行った結果、モデル適合度の十分なモデルを得た(図1)。4つの認知的方略群で達成動機及び達成目標が学習行動に及ぼす影響が異なるか否かを検討するために、各群で同じパスを想定するがパス係数を制約しないこととして多母集団同時分析を実施した。その結果、SO群においては自己効力感(「能力の社会的位置づけ」)が間接的に学習行動に影響を与えていたが、将来に対して悲観的なDP群とRP群においては、自己効力感が達成目標と学習行動に影響を与えないことが明らかになった。DP者の特徴ともされる特性不安(外山, 2011)は、DP群、RP群が他の群より有意に高かったが、DP群は「うまくいきたい」という達成欲求が高まると特性不安が弱まり、過去の成功認知がネガティブなRP群にはそのような影響は見られなかった。このことから、DP群の不安の高さについては、「今まで成功した」という過去の成功認知を励まし、達成欲求を高めることが有効であることが示唆された。

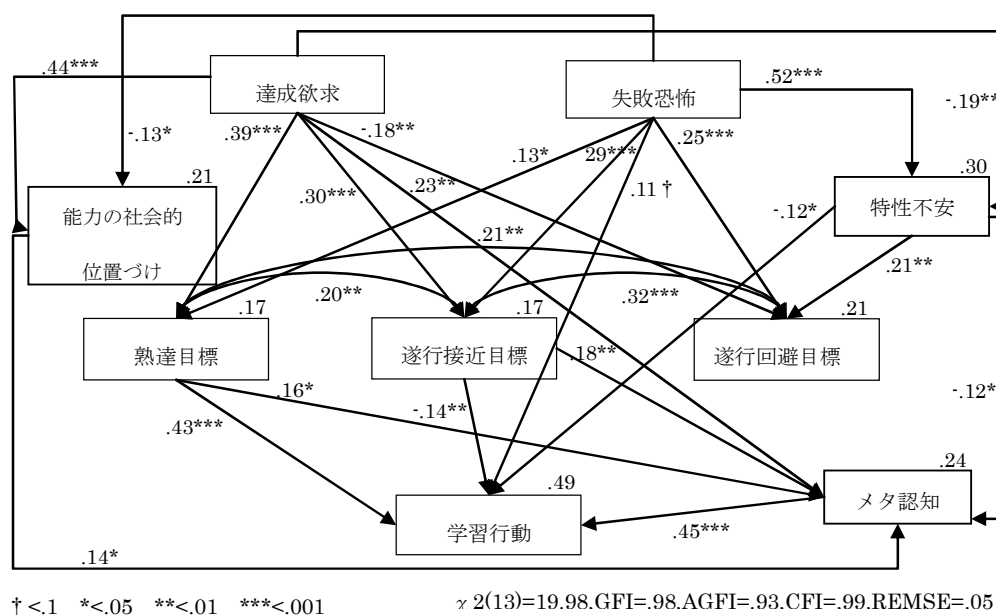


図1 各認知的方略群における達成動機及び達成目標、特性不安、自己効力感、メタ認知が

学習行動に及ぼす影響